
ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

こた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

【Nコード】

N2548Y

【作者名】

こた

【あらすじ】

いつものようにソニックとエッグマンは戦っていた。

ソニックが七つのカオスエメラルドを使いスーパーソニックへ変身し、誰もが勝負はついたと確信した…

しかし、異変は起こった。

突然暴れ出し、ソニック達を攻撃するカオスエメラルド。

一体カオスエメラルドになにが起こったのか？

そして、禍々しい暗黒色のハリネズミ 「ダーク・ザ・ヘッジホッグ」。

彼の目的は？そしてその正体は？

ソニック達の新たな冒険が始まる！

はじめまして こたと申します。
初投稿です。

よろしくお願ひします？

(追記) 挿絵 「。。。海兔。。。」様「http://www.

pixiv.net/member.php?id=360718

」

Character introduction (前書き)

ソニックをご存知ない、もしくはあまり詳しくない方もいらっしゃると思うので、一応キャラ紹介をします。

Character introduction

【ソニック・ザ・ヘッジホッグ】（主人公）

種別 ハリネズミ

年 15歳

特徴

- ・ 全身が青い
- ・ 大きな白い手袋
- ・ 赤いスニーカー
- ・ 大きなトゲ（数本）

特技

- ・ 超音速で走ること
- ・ スーパー化

（スーパー化とは、七つ集めると奇跡を起こすと言われている「カオスエメラルド」のパワーを取り込んでパワーアップすること。通常時を遥かに超える能力を有し飛行も可能だが、極端にエネルギーを消費するため短時間しかスーパー化を維持することが出来ない。）

自由気ままが大好きで曲がったことが大嫌い。短気なところがあるが、困っている人は放っておけない優しさを持つ。約束は守り、絶対に裏切らない。ただし、じっとしていることや水は苦手という欠点もある。

【マイルス・パウアー】（通称 「テイルス」）

種別 キツネ

年 8歳

特徴

- ・全身が黄色い
- ・大きな白い手袋
- ・大きな2本の尻尾

特技

- ・尻尾を回転させて飛ぶ
- ・機械いじり

心優しい子ギツネ。過去に尻尾が二本あることでいじめられていたが、ソニックの走る姿を見て勇気づけられ、彼の後を追いかけることになった。機械いじりが大好きで、その能力を活かしソニックをサポートする。

【ナックルズ・ザ・エキドゥナ】

種別 ハリモグラ

年 16歳

特徴

- ・全身が赤い
- ・手が大きく、手の甲に二本のトゲが付いている

特技

- ・穴掘り
- ・壁登り
- ・滑空

ソニックの喧嘩友達で良きライバル。「マスターエメラルド」という不思議な力を持つ大きなエメラルドの守護者。生真面目であるため、よくエッグマンに騙されることも。トレジャーハンターでもある。彼の拳は強力で、大きな岩も軽々と破壊できる。

【Dr・エッグマン】

種別 人間

年 不明

特徴

- ・ 体型が卵の様に丸い
- ・ 目に小さく丸いサングラス（と思わしきもの）をかけている

自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者。IQ300と高い知力を持つが、人の迷惑を考えない。何度も計画をソニックに阻止されている。

【シャドウ・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 不明

特徴

- ・ 全身が黒い（赤い箇所もある）
- ・ 見た目がソニックと瓜二つ
- ・ 走る時は地を蹴って走るといふより、靴から出る空気ですケートの様に滑走する様に走る。

特技

- ・ 音速で走る
- ・ カオスコントロール
- ・ カオスブラスト
- ・ カオススピア
- ・ スーパー化

「Dr・エッグマン」の祖父にあたる世紀の天才科学者「プロフェッサー・ジェラルド」によって生み出された究極生命体。「カオス

エメラルド」を使い、時空を歪ませることが出来る『カオスコントロール』の力を与えられている。

【シルバー・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 14歳

特技

- ・ 超能力を使って物を動かし、それを投げて攻撃できる
- ・ ESPによる飛行
- ・ スーパー化

荒廃した未来を変えるべく、未来からやって来たハリネズミ。様々なサイコネシスを使う。

【ハイク】（本名は不明）（オリキャラ）

種族 ハリネズミ

性別 男

年 ？

朱色の体を持つハリネズミ。見た目はソニックと少し似ているが、頭に大きな毛が立っている。（本人は少し気にしている。）記憶を失っているが、正義感が強く熱い。銃使いであり、その腕前はかなりのもの。ただし、ムキになると危険な銃弾を使うが本人はそれを危険と感じない。また、なかなかの俊足。

> i 3 6 4 7 5 — 4 5 7 1 <

【ダーク・ザ・ヘッジホッグ】（オリキャラ）

種族 ハリネズミ
性別 男
年 ？

今回の事件の主犯。カオスエメラルドを操る能力を持つ。シャドウの行方を追っているが、目的は不明。

> i 3 6 7 4 8 — 4 5 7 1 <

【エミー・ローズ】

種族 ハリネズミ
性別 女
年 14歳

「自称」ソニックのガールフレンド。今回もソニックを追いかけているが……。

C h a r a c t e r i n t r o d u c t i o n (後 書 き)

参考 ソニックチャンネル(公式HP)

Prologue

見渡す限り広い草原が広がっている

草原の真ん中で「彼」は昼寝をしていた。

太陽が少し眩しい。

だが、そよ風が心地良い。

近くで小河が流れている。

水の流れる音が心を静かにする。

チチチ

小鳥のさえずりが聞こえる。

なんて……平和なんだろう……

穏やかな表情を浮かべ、「彼」は目をつぶりながらそう思っていた。

「彼」は朱色の体をしており、背中には数本の大きなトゲがある。また二本の大きなベルトを身に付けており、片方は腰に、またもう片方は無造作に肩にかけていた。

大きな草が生えているところで、「彼」は少しウトウトしていた…

その時

「ん………？」

空で起きている小さな異変に気づき、「彼」はゆっくり目を開ける。

「………！？」

「彼」は驚いて体を起こした。

少し目を疑った。

「彼」の寝ている場所だけ日陰になっている。

しかし空に雲は一つもなく、周囲にもその要因となるような物はなかった。

「な………なんだこれ………」

「彼」は小さく呟いた。

その時空に気配を感じ、「彼」は空を見上げる。

「違う……シャドウ・ザ・ヘッジホッグじゃない……」

どこからか不気味な声が聞こえた。

「誰だっ!?!」

「彼」は空を見上げたまま腰のベルトに装着していた拳銃二丁を取り出した。

「……まあいい、教えてやろう……」

シューウウウウウウウウウウ……!!

声のする方に禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

鳥達はこの存在に気がついたのか、皆飛び去っていった。

その煙はだんだん一匹のハリネズミとなった。

そのハリネズミはゆっくりと地上に降り立つ。

サクッ

草を踏む音が少し大きく聞こえた。

「俺の名は……ダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世の唯一にして究極の存在……」

静かな物腰でこそあるが、海の底のように冷たい群青の瞳と漆黒で背中に悪魔のような翼の生えた体を持つハリネズミ　ダークは不敵にそう言い放った。

「……あんたが俺に何の用だが知らないが……究極の存在だって？ハッ！笑わせるな。悪いが俺にはあんたが究極の存在だなんてちっとも思えないね。」

チャキッ！

「彼」はダークに二丁の銃を構えながら言った。

「……貴様に用は無い……だが、折角だ。俺が究極の存在である証拠を見せてやるう。」

ザッザッザッザ……

ダークは不気味な微笑みを顔に浮かべながら、「彼」に向かってゆつくり歩き始めた。

「来るな！」

ダンッ！ダンッ！！

「彼」はダークに銃を撃った。

ビシッ！ビシッ！！

「なっ……！！！」

弾は当たったが、ダークは表情一つ変えずに近づいてくる。

「これならどうだっ！」

ジャキッ！

「彼」は一旦銃を下ホルダーに戻し、背中から先程の銃よりも数段威力の高いグレネードランチャーを取り出した。

「行っけえ　　！！！」

ドンッ！ドンッ！！ドンッ！！！！

「彼」はダークに向かってグレネードを三発撃った。

ドガ　　ン！！！！

グレネードはダークに命中し爆発した。

その衝撃で周りの草が燃えているのが分かる。
しかし、ダークの姿は噴煙で見えない。

シュ~~~~ッ
……

煙が大分引いてきた。

「……つな！なんだとっ！！？」

「彼」は自らの目を疑った。

彼の周囲こそ惨状と化していたものの、ダーク本人は無傷だった。

その上未だにこちらに向かってゆっくりと歩き続けている。

「くっ、くっそお　！！」

ダッ！！

「彼」は走り出した。

「俺の足の速さをなめるなよ！！お前なんかを追いつけるものか！」

「彼」は走りながら振り返った。

「……つな！？」

さっきまでダークが居た場所にダークは居なかった。

「言っただろう…？この世の絶対にして究極の存在だ…と。」

「!？」

「彼」は正面に向き直った。

そこには片手を「彼」に向けているダークが居た。

「やっ、やばい…！」

このスピードだと止まれない…!

ダークの手に紫色の光が集まる。

「……………消える」

ドゥンッ…!

ダークの手から黒い閃光が迸った。

ズガアアッ

「うわあああああっ！！！！」

「彼」はビームに直撃し、空中に投げ出された。

ドザッ！！

「彼」は地面に叩きつけられ、意識を失った。

「……………フン。」

蔑むように嘲笑うとダークは姿を消した。

????????????????

「……………くっ……………」

太陽が西へ沈もうとしているとき、「彼」はようやく目を覚ました。

「彼」はよろよると立ち上がった。

「ガッ！！？」

「彼」は再び倒れそうになった。

全身に負った怪我が鋭い痛みとなって彼の体に奔った。
砂嵐に見舞われたように目の前が霞む。

「……………ここは……………どこだ……………？」

SONIC VS EGGMAN

ドガンー!!

ヒュ~~~~~ドーン!!!

何発もの爆音が響く。

ここは自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者、Dr・エッグマンが作った基地の中だった。

基地の中は昼間であるにも関わらず、少し薄暗く感じられた。基地内の司令塔のような大きな建物が不気味にそびえ立っている。

名前の通り卵のような体をしているエッグマンは、毎度のように自分が作った大きなロボットに乗り「彼」を追いかけていた。

「待~~~~え~~~~!!」

エッグマンはロボットを操縦しながら叫ぶ。

「COME ON!!」

「彼」 ソニックは走りながら言った。

音速で走り回る青いハリネズミ ソニック・ザ・ヘッジホッグ。
大きな白い手袋と赤いスニーカーが特徴的な彼は、何度もエッグマ

何かがロボットを攻撃した。

「ソニックー!!」

ブ~~~~ン!

その正体は愛機の小型飛行機・トルネードに乗ったテイルスの放ったミサイルだった。

彼は二本の尻尾を持った黄色の子ギツネで、ソニックの良きパートナーである。

「ソニック! 援護するよ!!」

テイルスは操縦席から笑顔を見せながら言った。

「THANKS!!」

ビッ!

ソニックはテイルスに親指を立てた。

「忌々しいのが二匹になりおったワイ! こうなったらフルパワーじ

や！！」

ガチャツ、ガチャツ！

ギユイ　　ン！！

ロボットは変形しさらに大きくなった。

「へへっ、そうこなくっちゃ！」

ソニックは余裕たっぷりにはくそ笑んだ。

「その余裕もそこまでじゃ！覚悟しろい！！！」

ゴオオツ！！

ロボットのスピードが上がった。

「俺に追いつけるかな？」

バビュンツ！！

ソニックもさらにスピードを上げた。

ド　　ンッ！！

その際にソニックはロボットにホーミングアタックをした。

「きかぬわっ！！」

ギユワア　　ン！！

バキィッ！！

ロボットは勢いよく回転し、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっ！」

ババッ！

ソニックは空中で体制を整えて着地した。

エッグマンはテイルスの方を見た。

「貴様の相手はこいつじゃ！ポチッとな！！」

エッグマンは再びソニックを追いかけた。

「COME ON!! COME ON!!」

ダッ!!

ソニックは逃げながら言った。

「ハッ!!」

シュンッ!!

ソニックの姿が消えた。

「なにいつ!? ソニックめ、どこへ消えた!?!?」

エッグマンは辺りを見回した。

「じじじっ!!」

頭上から声がした。

「むうっ!?!」

エッグマンが上を向いた。

ギユイイイイ

ン!?!!

そこには回転しながら落下してくるソニック。

ドガ　　ン!?!

「のわぁっ!?!」

ソニックはロボットの頭上に回転しながらアタックした。

「まだまだじゃあ〜!?!」

ギユワ　　!?!

ロボットは再び回転を始めた。

「ぐぁっ!?!」

ソニックは再び弾き飛ばされた。

ババツ！

ドガアンー！！

ソニックは空中で体制を整え、壁を蹴りもつ一度ロボットにアタックした。

「きかぬと言っとなるじゃろがー！！」

ギユワ ！！

エッグマンはロボットを再び回転させ、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっー！！」

ソニックは空高く弾き飛ばされた。

「ホ ホホホ ！！ソニックよ！貴様を倒すために新しくつくったこの「E Z」はそう簡単に倒すことは出来んぞ ！！」

エッグマンは高笑いをした。

「さあ て、どうかなあ ？」

ソニックは空中で不敵に笑いながら言った。

「ふんっ、貴様は「E」「Z」を倒すどころか傷一つすらつけておらんぞー！」

エッグマンは憎たらしく言った。

その時

キラアツ…

ソニックの周りに赤、青、黄、緑、白、水色、紫の光が現れた。

「さて、これはなんでしょう？」

ソニックはにやけながら言った。

「んなっ……き、貴様、まさかっ！…！？」
エッグマンは叫んだ。

そう……ソニックの周りに現れたのは七つ集めると奇跡を起こすと
言われている カオスエメラルド。

ソニックは目を閉じた。

グオオオオオツ!!!

カオスエメラルドがソニックの周りを勢いよく回り始めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!
!!!!!!!」

ソニックの体が徐々に金色になっていく。

「やった!スーパーソニックだ!!」

テイルスはミサイルを破壊しながら嬉々としてそう叫んだ。

シユオオオオオオツ!!

「ハアアツ!!!!」

ドンツ!!!!

ソニックはカオスエメラルドを取り込み神々しい金色の光を纏う
スーパーソニックになった。

「さあ て、遊んでやるぜエッグマン!!!!」
ソニックは宙に浮きながら余裕たっぷりに告げた。

「ぬおおおっ!!」
エッグマンは焦りだした。

SILVER VS DARK

一方その頃……ソニック達が戦っている場所から遙か離れた場所にある水の公国 「ソレアナ」に一匹のハリネズミが居た。

「ソレアナ」は海上都市であり、以前ソニック達が長き戦いを繰り広げた場所でもあった。

「……ああ ……！ 今日も平和だな ……」

ソレアナの街から少し離れた浜辺で一人ねっころがりながら大きく伸びをした銀色のハリネズミ シルバー・ザ・ヘッジホッグは一人呟いた。

雪のような銀白の毛皮に身を包まれ、ブーツを思わせる少し丈の高い靴が彼の気高さを彷彿とさせる。

ザザ ……！！

潮の良い匂いがする。

海の潮風が、彼の白い胸毛を揺らす。

その時

「……………」

彼は異変を感じ、静かに目を開いた。

しかし周りに誰もおらず、目の前には半透明の海、空にはカモメが飛んでいるくらいだった。

「……………気のせいか。」

そう呟き、再び目を閉じた時

「……………違う、こいつもシャドウじゃない。」

突然聞こえた不気味な声にシルバーは体を起こし、周りを見回した。

「誰だ!？」

シルバーは周りを見回しながら叫んだ。

「!?!」

シルバーは上空に気配を感じ、空を見上げる。

「な、何だあれ!?!」

気配のあるところに禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

そしてそのまま一匹の漆黒のハリネズミになった。

「なっ!?!……お前は……メフィレス!?!?!」

シルバーは身構えながら言った。

確かにその姿はメフィレスに似ていた。

かつて荒廃した未来で自分を騙し、ソニックを殺させようとして全ての歴史の抹殺を企んだあの男

「メフィレス・ザ・ダーク」に。

奴はイブリースと融合し、再び「過去・現在・未来」同時に存在する超次元生命体 「ソラリス」となった。

だが、奴は俺とソニック、そしてシャドウと共に倒したはず。

なのに何故……？

フワッ……

漆黒のハリネズミは無言で海の上に舞い降りた。
彼の背中にある大きな黒い翼がバサリと音をたてる。

「……メフィレスとは誰の事だ？俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジ
ホッグだ。」

そのハリネズミ ダークは静かに言い放った。

「……この世の絶対にして究極の存在だ。」

「……それで、その究極の存在が俺に何の用だ？」

シルバーはダークを睨みつけながら言った。

「貴様に用は無いが……折角だ。俺の力を見せてやるぞ。」

スッ

そう告げるとダークは静かに右の掌を左肩の方へやった。

そして掌に雷光の如く黒い光が集まる。

バチバチバチバチ

!!!!

「!?!」

シルバーは驚愕していた。

「ダークスピア!」

ビュンッ!!

ダークが腕をシルバーに向かって振り下ろすと、数本の黒い光の矢が一齐にシルバーに襲いかかった。

「無駄だ!!」

シルバーは両手を前に突き出した。

ピタッ!!

矢は全てシルバーの周りで青白く光り、静止した。

「……………ほう。」

ダークは微かに驚いた表情を見せた。

「俺の超能力をなめるなよ!お返しするぜ!」

ビュンッ!!

グオオオオオッ!!

シルバーがダークに向かって腕を振ると矢は全てダークに向かって飛んでいった。

ドガーーン!!

ダークに命中すると矢は爆発した。

シューウウウウ

煙が晴れると……

「なっ、何!？」

シルバーは驚き目を見開いた。

薄れてきた煙の中にダークが無傷で浮いていたからである。

「これでどうだ!」

バツ!

シルバーは大きく跳躍した。

「くらえっ!」

バリバリッ!!

シルバーはダークの近くに着地し、周りにサイキネシスを放った。

バシユンッ!!

それは命中したものの、ダークは表情一つ変えずに浮かんでいる。

「……なかなかやるようだが、そんな程度で俺を倒す事は不可能。」

「なっ!?!」

シルバーは自分の目を疑った。

「もっいいい……消える。」

静かに言い放つと、ダークは片手をシルバーに向けた。

グオオオオオオオオオオオ!!!

ダークの掌に黒い光が集まってきた。
どれほど強い威力を發揮するのかは、その光の大きさを見れば一目瞭然だった。

その余派がダークの足元の海水を大きく揺らしている。

「くっ、くそっ!」

まずい、やられる !

シルバーは防御体制に入り、目を閉じた。

その時

ギユウウウウウウウウ……………ン

ダークの強大で禍々しいオーラが徐々に薄れていくのを感じた。

「……………？」

シルバーは徐に目を開けた。

「……………」

ダークは無言で海の彼方を見つめている。

「……………あつちに大きな力が……………この力はカオスエメラルドか……………？」

「カオスエメラルド……………だと？」

シルバーは思わずそう尋ねた。

ダークはシルバーの方に向き返した。

「……今回は見逃してやる。次会った時は容赦無く消す。」

ギユウウウウン！

そう告げるとダークはゆっくり上昇した。

「ハアツ！！」

ドシュツ！！

ダークは遙か彼方に飛び去っていった。

「……なんだっただんだあいつは……？」

シルバーは呆然としたまま、そう呟いた。

「カオスエメラルド……何か嫌な予感がするが、このまま奴を放っておくわけにはいかない。」

ボワアツ…！

シルバーの体が青く光った。

ふわぁっ……

そしてそのままシルバーの体がゆっくりと宙に浮かんだ。

「ハアツ…！」

シュンッ…！

そして、そのままダークの消えた方へと猛スピードで飛び去っていった。

SILVER VS DARK (後書き)

この話は「新ソニ」が終わってから約一週間程経った頃という設定で読んで頂けたら嬉しいです。

原作では「ソラリス」を倒した後はシルバーはもう未来に帰っていますが、今作ではシルバーはまだ未来に帰っていない設定です。理由はご想像にお任せします(笑)

エッグマンは最早なす術がなかった。

????????????????

その頃、ソニック達の居る場所より遙か上空に一匹のハリネズミが居た。

「……シャドウに似ているがシャドウじゃない。奴は一体何者だ……? まあいい、どうやら奴はカオスエメラルドの力でパワーアップしたようだな。俺の力でちょっと遊んでやるか。」

スッ

ハリネズミ ダークは静かに片手をソニックに向けた。

そんなダークの姿に気づきもしないソニックは、エッグマンに最後
に人差し指を立てた。

「覚悟しな、エッグマン！！！！」

ドンッ！！

ソニックは一気に力を開放した。

「くっ、もはやここまでか……」

エッグマンは目を閉じた。

しかし、そのまま何ら変化が起こることはなかった。

「……………」

エッグマンは静かに目を開けた。

シューウウウウウウウ……

スーパーソニックの力が少しずつ弱まっていくのが分かる。

「ぐっ……ぐぐぐっ……！！！」

スーパーソニックは苦しげな面持ちだった。

「ソニック、どうしたの？」

テイルスがトルネードの操縦席から尋ねかけた。

「ぐっ……体が……動かないっ……！！！」

スーパーソニックは苦しそうに言った。

「えっ！？」

テイルスは尋ね返した。

ニイイツ！

それを聞いたエッグマンの表情に笑みが浮かぶ。

「ホ　　ホホ　　！！情けないのうソニック！攻撃チャンスじゃ
「！！！」

ウイイイイン！

ロボットの片腕がゆっくり上がっている。

「やめる　　！！エッグマン！！！」

ドガ　　ン！！

テイルスがミサイルを放ち、見事ロボットに命中する。

「ぎゃああ　　っ！！！」

ガシヤ　　ン！！

ソニックと対峙しているエッグマンすら自分の目を疑った。

ドサッ！

ソニックは地に落ちその場に倒れた。

「ハア ハア 」

ソニックは両手両足を地面に付けたまま荒呼吸をしている。

コオオオオッ

そして上空には異様な光を放つカオスエメラルドが浮かんでいた。

「何がどうなっておるのじゃ?!」

エッグマンがそう言った瞬間

T A R G E T

「んなつ!?!」

ようやく呼吸が整ったソニックは驚いていた。

なんだっ たんだ……? ?

そう思いながら分裂し七つに戻り、まとまらない動きで浮揚するカオスエメラルドに近寄った。

その瞬間

ピカアッ!!

カオスエメラルドが眩い光を放った。

「っな!?!」

ソニックは思わず足を止めた。

「ソニック、危ない!!」

ヒュンツ!

テイルスが叫んだ瞬間、カオスエメラルドの一つが猛スピードで突っ込んだ。

「のわっ!?!」

バツ!

ソニックはギリギリでそれをかわした。

「くっ、SAFE!」

バツバツ!!

ソニックは大きくバックステップをし、カオスエメラルドから離れた。

「ど、どうなってんだ？」

コオオオオオツ

異様な光を放ち続けるカオスエメラルドに視線を投げかけながらソニックは呟いた。

ヒュッ！

そして再び一つがソニックに襲いかかった。

「くっ！」

ソニックはまたもギリギリでかわした。

「くそ、何てスピードだ！」

バツ！

再び大きくバックステップをしながらソニックは苦々しげにそう呟いた。

「ソニック、乗って　！！」

トルネードがソニックに近づいてきた。

その時

ピカアアツ！！！！

カオスエメラルドは再び強い閃光を放った。

「ま、マズい！！テイルス！来るな　！！」

ソニックは叫んだが　　最早手遅れだった。

バキィッ！！

カオスエメラルドが再び肉眼で見えないほどの速さで凝結し
トルネードを貫いた。

「なっ！！？」

ヒュルルル

ソニックの叫びと共にトルネードは回転しながら墜落し、

ドガ ソー！！

そのまま爆発した。

「テ、テイルス
！！！！！！！！」

！！！！！！

ソニックは叫んだ。

墜落した所から大きな黒煙がもくもくとあがっているのが分かる。

ドガアッ!!

「ぐあっ!!」

トルネードの墜落に気を取られている隙に、カオスエメラルドのつがソニックの腹に猛スピードで突っ込んだ。

「ぐっ!!」

ソニックは腹を押さえながら片膝をついた。あまりの激痛に一瞬頭が真っ白になった。

「く……」のままじゃやられる 「!

ソニックがそう思った瞬間

ビュンッ!!

「のわあっ!?!」

黒い影が突然現れ、ソニックの腕を掴んだ。

そのまま猛スピードでどンドンカオスエメラルドから遠ざかって行く。

「だ……誰だ?」

空いている方の手で痛みが取れない腹を押さえながら、ソニックは自分の腕を掴んでいる者を見た。

ソニックの腕を掴みながら音速で走る……いや滑走する者の正体は

……

「お前は シャドウ!?!」

彼に瓜二つの黒いハリネズミ シャドウ・ザ・ヘッジホッグ
グだった。

「……………」

表情一つをも変えることなく、シャドウは無言で滑走し続けた。

バツ！！

シャドウは大きく跳躍し、エッグマンの基地から脱出した。

ストツ

軽やかに着地し、そのまま再び滑走しはじめた。
その地を滑る音は、まるで氷の上を滑るアイススケートの様な音だった。

基地から大分離れた所でシャドウは徐々にスピードを落とし、

ドサツ！

「おわっ！」

シャドウは乱暴にソニックの腕を離した。

ソニックはバランスを崩し地に倒れた。

「……………」

ドシユッ！

相変わらず無口のままシャドウは猛スピードでどこかに走り去り、あっという間に姿が見えなくなった。

「シャドウ……………」

ソニックはシャドウの消えていった方向を見ながらそう呟いた。

????????????????????

「……………くっくっく……………ハ　　ツハツハツハ！！！！！」

上空からソニック達を見下ろしていたダークは突如高笑いをした。

「とうとう見つけたぞ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ!!!!!!!!!!」

ドギョーンッ!!

ダークは目にもとまらぬ速さでシャドウを上空から追跡した。

“ ONLY ” VS “ ULTIMATE ”

「なにいつ!? テイルスが!?!」

ソニックから一部始終を聞いた赤いハリモグラ 「ナックルズ・
ザ・エキドゥナ」は驚き目を見開いた。

ソニックはあの後ナックルズを訪ねていた。
とある特別なエメラルドを守りながら暮らすナックルズはソニック
の昔からの喧嘩友達であり、良きライバルである。
ナックルズの住んでいる場所は森の中にある、少し神秘的な感じを
受ける場所だった。

そんなナックルズの問いかけにソニックは目を閉じながらゆっくり
頷いた。

「……………くっ!」

ナックルズはソニックに背を向けた。

「暴走したカオスエメラルドを止めるためにマスターエメラルドが
要るんだ。貸してくれないか?」

ソニックは尋ねた。

カオスエメラルドの暴走を止める力を持つマスターエメラルド

あれを使えばカオスエメラルドを止められるかもしれない。

ソニックはそう考えていた。

「……………それがな……………」

ナックルズはソニックに背を向けたまま話を続けた。

????????????????????

シャドウは荒野を滑走していた。

見渡す限り茶色っぽい風景が広がっている。

周りは茶色く大きな岩がゴロゴロ転がっており、植物は見当たらず生物の気配は無かった。

「……………」

シャドウは滑走を続けると同時に「何か」の気配を感じていた。

キッ！

シャドウは急に立ち止まった。

バツ！

振り返ったが、そこには相変わらず茶色い風景が広がっているだけだった。

「さっきから僕のをつけているのは誰だ？」

彼はまるで独りごとの様に呟いた。

「……………」

シャドウは遥か上空を見上げた。

澄んだ青空に様々な大きさの白雲が散らばっている。

スッ

シャドウは片腕をもう片方の肩の方に伸ばした。

ババババッ！！

シャドウの手に黄色い光が集まる。

ビュンッ！！

「カオススピア!!」

シャドウが遙か上空に向かって腕を振ると、その手から黄色い光の矢が勢いよく放たれた。

ドドドッ!!!

光の矢は何も無いはずの上空で何かに当たり爆発した。

空は灰色の煙に満ち溢れた。

「!?!」

徐々に煙が引いてきたところでシャドウは驚いた表情を見せた。

「……ほう、俺に気づくとは……流石だなシャドウ。」

煙の中から宙に浮遊する黒いハリネズミが現れた。

「メフィレス……? いや違う。君は誰だ? 何故僕を知っている?」

シャドウは黒いハリネズミに人差し指を向けながら尋ねた。

スッ

黒いハリネズミはゆっくりと下降し、地に降りた。

「……俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一の究極の存在だ。」

そしてゆっくりと告げた。

「……何だそれは。僕の真似のつもりか？」

シャドウは蔑むように言った。

「……いや、真似などでは無い。これから貴様を消し、俺が真の究極生命体になるのだから……」

「……何だと？」

シャドウは気にもとめるようなこともせず、静かに聞き返した。

「……貴様に手加減は要らないな。最初から全力でかかせてもらおう。」

スッ

ダークがゆっくり両腕をシャドウに向けた。

「……君が僕に何の用だが知らないが、今消されるわけにはいかない。」

「こちらもこの究極の力 全力で行かせてもらうぞ。」

シャドウも身構えた。

10mほど離れた場所で対峙している二人の間に鋭い沈黙が走る。

ヒュオオオオオオオオオツ！！

そして二人の間に一風の風が吹いた。

ドンツ！！！

二人は一気に力を開放した。

シャドウは神々しい金色に光り、ダークは禍々しい闇色に光った。

「ハアツ！！」

ドンツ！！

ダークの両手から黒く巨大な閃光が放たれた。

バツ！

シャドウは大きく跳躍し閃光をかわした。

ドガ　　ン！！！！

閃光は地に突き刺さり、巨大な穴を開けた。

シュバツ！！

シャドウは宙で蹴りの体制をとると、ダークめがけて勢いよく急降下した。

ドガッ！！

鈍い音が響く。

「チッ！」

シャドウは舌打ちをした。

シャドウの重い一撃を、ダークは軽々と片腕のみで受け止めていた。

「無駄だ！」

バキッ！

ダークは無造作にその腕を振り、シャドウを弾き飛ばした。

ズザッ！

ドンッ！

シャドウは空中で体制を整えてから着地し、一気にダークに肉薄し

た。

ドガッ!!

シャドウがダークに回し蹴りをしたが、またしてもダークの腕にガードされてしまう。

「ハアアッ!!」

ドガアッ!!バキィッ!!ドゴオッ!!

シャドウはそのままダークに凄まじい速さで攻撃ラッシュを続けた。

しかし、全てガードされてしまう。

バッ!

「なにっ!?!」

シャドウがダークの顔めがけて手刀を放ったが、かわされた拳がその腕を掴まれた。

「タアッ!!」

シュバッ!!

ダークはシャドウを思い切り上空に投げ飛ばした。

「クッ！」

シャドウは再び宙で体制を整え、地上にいるはずのダークの方を見た。

「!?!」

しかしそこにダークはいない。

「こっちだ。」

頭上で声がした。

「!?!」

顔を上げたシャドウは自らの目を疑った。
そこに両腕を頭の後ろで組み、振り上げているダークがいたためである。

バキィッ!!!

「ぐあつ!!」

ダークは両腕を振り下ろし、シャドウを地上に叩き落とした。

スタツ!

シャドウは無事に着地し、ダークを睨みつけた。

バツ!

「カオススピア!!」

ドドッ!!

シャドウは再び光の矢をつくり、ダークめがけて放った。

再度それは命中し、宙で爆発を起こした。

煙が引いてくると、防御体制でかまえているダークの姿が臙気にだ
が露になった。

そんなダークを、シャドウは静かに睨みつけていた。

「……今度はこっちから行かせてもらおう。」

ドンッ！！

ダークは空中から一気にシャドウに肉薄した。

「喰らえ！」

ダークはシャドウの顔にパンチした。

ガッ！！

シャドウはそれをガードした。

「まだまだだ。」

バババババババツ！！！！

ダークは目にも見えぬ速さでシャドウに連続的にパンチをした。

ガガガガガガッ！！

シャドウは再び全てガードした。

「フツ、面白い。」

バツ！

ダークは一度シャドウから離れ、距離をとった。

「ハアッ！！」

二人は同時に叫び、一斉に肉薄した。

シュンッ！

そして二人が衝突する瞬間、双方の姿が消えた。

ドガンッ！！

虚空で大きな鈍い音が響く。

トトトトトトトッ！！！！！

鈍い音はその後数回に渡って響き、宙に衝撃波となっては消えた。

そう、二人が宙で打ち合っているのだ。肉眼では見えないほどの速さで。。。

音速を超えるそのスピードに姿を確認することが出来ない。

パッ！

再び二人の姿が現れると、互いに距離をとった。

スタッ！

二人は同じタイミングで着地した。

再び二人の間に沈黙が走る。

「……流石だな。だがこうでなくては面白くない。」

ダークが表情一つも変えず、静かに告げた。

「……」

シャドウは何も言わず、ただダークを睨んでいる。

「……一つ面白い物を見せてやろう。」

スッ

ダークは静かに片腕を空に向けた。

「……？」

シャドウは空を見た。

遙か上空から何かが降りてくる。

その数は七つ。

「バカな……カオスエメラルドだと!？」

シャドウは叫んだ。

「……そう、カオスエメラルドだ。

こいつは俺の好きな様に動く……この様にな。」

スッ

ヒュッ!

ダークが腕をシャドウに向けると、カオスエメラルドの一つがシャドウに猛スピードで突っ込んだ。

「クッ!」

シャドウはギリギリでかわす。

「!?!」

その刹那、ダークがシャドウに肉薄した。

バキィッ！！

「ぐはぁっ！！！」

そのままシャドウを殴り飛ばした。

ズザザアアッ！！

シャドウは地面に叩き付けられた。

「……………」

シャドウは立ち上がるが、再びカオスエメラルドがシャドウに襲いかかる。

「……………さあ、どうするシャドウ？」

ダークは悠然としてシャドウに問いかけた。

「マスターエメラルドが盗まれた!？」

「ああ、何者かにな。」

驚き声を上げるソニックを尻目に、ナックルズは落ち着いた様子でそう言った。

「じゃあまずはマスターエメラルドを探すのが先だな。手掛かりは無いのか？」

ソニックの提案もむなしく

「無い。」

ナックルズは表情を変えずそう断言した。

「……hum。しょうがない、ちゃっちやと探しに行くとするか。」

ソニックは呆れたように肩をすくめながら言った。

「俺も行く。今回の落度は俺にあるからな。」

ナックルズもばつが悪そうにソニックにそう言った。

「OK。Get ready……」

バッ

「gg……」

ダッ!!

ソニックとナックルズは勢いよく走り出した。

????????????????

ドガアッ!!

「グハアッ!!」

顔面に激痛が奔る。

ズザザザザアッ!!!

そして地面に叩きつけられる。

もう何度奴の攻撃を受けたか

シャドウはよろよろ立ち上がりながら思っていた。

彼の体は既に傷だらけだった。

距離を取ろうとしてもダークは必ず先回りをしている。
逃げるつもりはなかったが、絶対に逃げられない状態だった。

ヒュッ!

そして再びカオスエメラルドが目の前に飛んでくる。

「くっ……………」

立っているだけでもやっとな状態で必死に避ける。

「ハアッ！」

そして再びダークが自分に向かって攻撃を仕掛けてくる。

ドガアッ！！！！

今度は腹部に激痛が奔る。

「ぐあっ！！！」

バツ！

吹っ飛ばされながら体制を整えたが、着地と同時に膝を付く。

「くっ………」

ぜえぜえと荒呼吸をしながら顔を上げる。

「！！！」

目の前で奴が

ダークが片腕をあげている。

ドンッ！！！

ダークが腕を振り落とすと同時に
なった。

目の前が真っ暗に

????????????????

「ヒュッ 絶景だねえ！」

ソニックは軽やかに走りながら、辺り一面に広がる茶色っぽい風景
を見回した。

「こんな所、初めて来たな……」

ナックルズも同じように走りながら、落ち着いた表情で独りごと。

「天気も良いし、最っ高だねえ」

ソニックは心なしか楽しげに見えた。

「お前なあ……それにしても、マスターエメラルドは一体どこにあるんだ……？」

ナックルズはそんなソニックの楽観的な様子に呆れつつ、周りを見渡していた。

キキッ！！

ドンッ！

「おわっ!?!」

ソニックが急に立ち止まったため、ナックルズはソニックに正面から激突してしまった。

「おいソニック！急に止まるな！」

ナツクルズは真っ赤になった鼻を押さえながらソニックに怒鳴った。

「……………なあ、あれシャドウじゃないか？」

ソニックが前方を指さしながら言った。

「あっ？」

ソニックが指差した方を見ると、遙か遠くに二つの黒い影が見えた。そのうち倒れている方の姿は、シャドウのように見える。

「……………大したこと無かったな……………シャドウ・ザ・ヘッジホッグ！！」
ダークは目の前に伏しているシャドウを見下ろし、蔑むように言った。

スッ

そして徐に片手を上げた。

ギユオオオオオオオ！！！！

その手に紫色の閃光が集まってくる。

その時だった。

「シャドウ!!?」

シューウウウウウウ……ン

ダークは徐々に力を弱めながら、突然掛けられた声の方へ振り返った。

そこにいるのは、青いハリネズミと赤いハリモグラ。

「……何だ貴様らは?」

ダークは腕を下ろしながら尋ねた。

「俺の名はソニック!ソニック・ザ・ヘッジホッグだ!」

ソニックはダークに鋭い眼差しを向けながらそう叫んだ。

「俺はナックルズ。」

ナックルズも同じようにダークを睨みつける。

「……俺の名はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一究極の存在だ。」

「What!?!」

ソニックは思わず聞き返した。

（こいつ、シャドウに似ている……。）

その気高く重々しい物腰も他を圧倒する気迫も、シャドウを彷彿とさせるものであった。

「そして……エメラルドを操る者だ。」

「……………」

ソニックとナックルズの様子が一変し、驚いた面持ちに変わる。

「まさか、あの時カオスエメラルドの様子がおかしくなったのはお前の仕業か!？」

ソニックは尋ねた。

その言葉に、ダークは怪訝そうに首を傾げた。

そして少し前に見た景観を思い出し、不敵な笑を浮かべる。

そう、彼は見ていたのだ。

あの時 基地でのエッグマンとのあの一戦を 。

「……そうか貴様、どこかで見たことがあると思ったらあの時のハリネズミか。」

「……やっぱりお前の仕業なんだな!？」

ソニックの表情がより険しくなった。

「ああ、俺がやった。俺の能力の腕試しにな 。」

ダークはゆっくりと告げた。

「まさか、マスターエメラルドを盗んだのもお前か!？」

ナツクルズがそう尋ねると、ダークは曇った空を見上げながら呟くように言った。

「……………マスターエメラルドか、あれは俺にとって邪魔な存在だ。」

「だったらどうした!!」

ナツクルズは業を煮やしてそう叫んだ。

そんなナツクルズにダークは言い放つ。

「見つけ次第排除する。」

「なっ、なんだと!?!」

ナツクルズ表情が一変し、冷や汗が頬をつたった。

ザッ!

ソニックは一步前になると、ダークを指差し言い放った。

「エメラルドを止めるんだ!!!」

ダークは動じる様子もなく、不敵に囁いた。

「……止められるものなら、止めてみるがいい。」

スッ

ダークは戦闘体型に入りながら言った。

「ああ、分かったぜ！！ナックルズ、遅れるなよ！」

ソニックも身構えた。

「ああ。」

同じくナックルズも。

両者の間に数秒の沈黙が訪れる。

「Ready……………」

ソニックはまるで短距離走の選手のような構えをとった。

「GO!!!!!!!!!!」

ギョーンッ!!!!!!!!!!

ソニックは一気にダークに肉薄した。

「ハアアッ!!」

ドカアッ!

そのままダークに鋭い蹴りを放つ。

「甘いな!」

ガッ!

ダークは怯むことなくその足を掴んだ。

「なっ!?!」

「うおおおおお!?!」

それに気づかないナックルズは一心にダークに向かって疾走している。

「ハッ!!」

ブンッ!!

ドガアッ!!

ダークはソニックをナックルズに向かって投げつけ、二人は弾き飛ばされた。

「「うわあっ!!」」

ズザアアア!!

「……………ッテテテ!!」

「遅い」

「!?!」

二人が顔を上げると、その上空にダークがいた。

「そくでもないみたいだぜ？」

ソニックがそう言った刹那、ナックルズは前方を見やった。

「んなつ！？」

ナックルズは目を疑った。

そこに片手をこちらに向けているダークがいたためである。

「……消える」

ドンッ！！

ダークの手から黒い閃光が放たれた。

バツ！

「ハアツ！！」

当たる直前にソニックはナックルズを連れて跳躍し、閃光をかわす。

ドガ　　ン！！

閃光が地面に突き刺さり爆発を起こし、地に大きな穴を開けた。

「なかなかやるじゃん。」

ソニックは跳躍したままその穴を見、乾いた口笛を吹いた。

バツー！

「ソニック、上だ！！！」

ナックルズが叫んだ。

「おわっ！？」

ソニックは顔を上げ目を見開いた。
そこにダークが両腕を組み振り上げていたからである。

「ソニック！頭を下げる！！！」

「お、おいナックルズ！？」

ソニックが聞き返したが答える間がなかった。

「落ちろ！」

ガッ!!

ダークの言葉と共に腕が降り下ろされるが、ナックルズがその重い攻撃を自分の拳で受け止めていた。

「……………ほう」

ダークは驚いたように言った。

「く、くく……………!!」

しかし、ナックルズ表情からは限界が伝わってくる。

「おらあああああ!!…!!」

ドゴオツ!!…!!

ナックルズはそのままダークを弾き飛ばした。

ヒュウウウウウウ…

ドガ　　ン!!…!!…!!

ダークはガードしたがそのまま吹っ飛ばされ、背後にあった大きな岩に突っ込んだ。

スタッ！

ソニックとナックルズは地に着地した。

ドゴオオッ！！！！

それと同時にダークの突っ込んだ巨大な岩に亀裂が奔り、粉々に砕けちった。

「！！！」

二人は驚愕した。

その中から傷一つついていないダークがゆっくりと姿を現したからである。

「……なかなかやるな」

スッ

不気味に笑いながらゆっくりと地に舞い降りた。

ソニック達は咄嗟に身構えた。

「……………まずはお前だ」

ダークがソニックを睨みながら左右に大きく両手を開いた。

シュオオオオオツ！

その両手から黒い光が溢れ出、彼の頭上に集まる。

そしてそのまま小さな球体になった。

フオオツ！

球体がダークの片手の上に浮かぶ。

「くられ」

バツ！

ヒュン！！

ピタッ！

「！？」

ダークがその腕を振ると、球体がソニックに向かって目にとまらぬ速さで飛空した。

そしてそのままソニックの腹にくっついてしまう。

「な、なんだこれ！？」

ギギギギッ！！

球体を剥がそうともがくも、まるでとてつもない粘着力を持つスライムのように取ることが出来ない。

「くそっ取れない！」

どんなに力を込めても球体は全く剥がれる気配がない。
流石のソニックも焦燥に駆られた。

「チッ！ソニック、早めにケリをつけるぞ！」

ナックルズはそう言い、腕を振り上げながらダークへ突っ込んだ。

「うおおおおおっ！……！」

ドゴ　　ン！！

そのままナツクルズはダークの顔を渾身の力を込めて殴りつけた。手には確かな感触を感じた。しかし

「……なっ！？」

その一撃を受けても一向に動じず、それどころか悠然と彼に手を向けてくるダークに彼は驚嘆した。

（ば……バケモノか……）
驚きと恐怖が混じり合った混沌とした心持ちで、しかし彼は漠然とそう思った。

「邪魔だ」

その言葉と共に、ナツクルズに向けている掌に紫色の光が集まる。

ギュンッ！！

「ナツクルズ！！」

バッ！

「おわっ!?!」

ソニックが猛スピードで走ってきてナックルズの腕を掴み跳躍した。

カッ!!

下ではダークがさっきまでナックルズが居た場所に紫色の太い閃光を放っていた。

(あと少し遅れていたら)

そう思ったナックルズの額に汗が流れる。

ダークは空中の二人に冷たい眼差しを向け、呟いた。

「…………ちよろちよるとすばしっこい奴め…………」

「へへっ!それが俺だからな!」

ソニックは得意げに言った。

スッ

ダークは両手をソニックに向けた。

「なら、これはどうだ？」

シュオオオオ！！

ダークの周りに黒煙が集まってくる。

ジャキツ！！

そしてそれは硬化し何本もの黒い剣へと姿を変えた。

バツ！！

ダークの腕が降り下ろされると同時に剣が一齐にソニック達に襲いかかる。

「Here we go！！」

ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！

ソニックは空中を移動し、剣を次々と避けて行った。

「へへっ、どんなもんだい！」

ギョーンッ！！

そのままソニックはダークに向かって猛スピードで突っ込んだ。

ドゴオンッ！！！！

鈍い音が響き、ダークの体が吹っ飛ばされる。

「チッ！」

ダークが舌打ちをし、空中で体制を整えようとした時

「でえりゃああっ！！！！！」

「なにっ！！？」

ドゴーーーーン！！！！

「ぐっ！」

いつの間にか先回りをしていたナックルズに殴り飛ばされ、再びソニックのもとに飛ばされる。

「行くぜ！」

キュイイイイイン！！！！

ソニックが勢いよく回転をし、

「ハアッ!」

ドガアッ!!

そのまま回転の力を利用し、鋭い一蹴でダークを地面に叩き落とす。

ドガーーーーン!!

ダークは勢いよく墜落した。

ババッ!

すぐさまダークは立ち上がり体制を整えた。

ギロツ!

ソニックを睨むかと思わせたその刹那

「……………くっくっく、ハッハッハッハ!!!!!」

突如高笑いをした。

「な、何を笑ってやがる!？」

ナックルズはダークを睨みながら叫んだ。

「……気づかないのか?あのハリネズミの異変に。」

ダークはナックルズに一瞥を投げかけながら、可笑しくて仕方ないように言った。

「なんだと!？」

その言葉を聞くや否や、ナックルズはソニックを見た。

ドサツ!!

ナックルズは絶句した。

ナックルズの視線を受けたソニックが力なく地面に落下したためである。

「お、おいソニック!!」

バツ!

ナックルズは慌ててソニックに駆け寄った。

「おい！どうしたんだよ！？ソニック！……！」

ナックルズはソニックの体を揺さぶるも、彼に何ら反応はなかった。ただ虚ろな眼差しを虚しく宙に投げかけていることを除いては。

そう、その姿はまるで電池の抜けたからくり人形のようなだった。

"Two Heroes” VS "ULTIMATE”

更新遅れました(汗) すいませんm(____) mあと1つお知らせです。

活動報告にも書きましたが、作者は現在テスト期間のため更新が1

2月中旬まで遅くなるかもしれませぬ(´；；´)

誠に申し訳ありませんorz

BATTLE AGAIN (前書き)

皆さんお久しぶりです、(＊、、)ノ
テスト終わったので久しぶりの投稿です

????????????

「ソニック！……ソニック！……！」

ナックルズはソニックの体を揺さぶりながら叫び続ける。

しかしソニックは何らかの反応をすることはなかった。

「クッククック……」

ダークは静かに、そして不気味に笑う。

キッ

ナックルズはダークを睨みつけた。

「何を笑ってやがる！？ソニックに何をした！！？」

ナックルズの噛み付くばかりの怒声にも怯むことなく、ダークは平然と言つてのけた。

「……何をしたかつて？そいつの腹を見てみな。」

「なにつ！？」

ナックルズはソニックの腹部へと視線を落とした。

「……まさか、これが原因か!？」

ナツクルズはダークが先ほどソニックの腹部に付着させた黒い球体を見ながら聞き返す。

「そう、そいつだ……」

スッ

ダークが徐に手を上げると

先程までどんなに力をいれても取れなかったあの球体が嘘のように簡単に取れ、ダークに向かってゆっくりと浮遊していく。

フッ

そしてダークの手の上で動きを止めた。

そのまま球体はカオスエメラルドにそっくりな形状の黒いエメラルドに姿を変えた。

「……こいつを使ってそのハリネズミの魂を封じ込ませてもらった。」

ダークはエメラルドを掴みながら悠然と告げる。

「っな!？」

ナックルズは耳を疑った。

「……それにしても、魂を封じ込ませるのにこんなに時間がかかるとは随分と「大きい」魂を持っているな。」

ダークは地に倒れているソニックに冷たく一瞥を投げる。

「……っつーことはそのエメラルドを壊せば、ソニックの魂は開放されるんだな？」

ナックルズはエメラルドを睨みつけながら尋ねる。

「ハッ！俺に傷一つすら付けられない貴様が俺からエメラルドを奪えるとも思っているのか?!」

ダークはエメラルドを掴んでいる腕を組み、嘲るように聞き返す。

「っく！馬鹿にするなあ!!」

ダッ!!

ナックルズはダークに向かって走りだす。

「うおおおおおおおおお!!!!」

目前に迫ったダーク目がけて拳を振り下ろした。

ドゴオオオオン!!!!

地面に大きく亀裂が奔る。

しかしそこにダークの姿は無かった。

「んなつ!?!」

ナツクルズは地面から腕を引き抜くと辺りを見渡す。

しかし、ダークは見あたらない。

「後ろだ。」

「!?!」

背後から声がし、ナツクルズは振り返る。

バキィッ!!!!

姿を確認するより先にダークの一蹴を喰らい吹っ飛ばされる。

「ぐあッ!」

ズザザザザアッ!!!!

「くっ……!!」

痛みに顔を歪ませながらナツクルズは立ち上がり、ダークを睨みつける。

「貴様如きが俺にかなうと思っているのか？」

ダークは不敵に告げる。

「ち…………くしょう…………！！」

ナックルズは悔しさに満ちた顔でギリギリと歯ぎしりをする。

「…………まあい。お前を消してからこのハリネズミも消してやる。」

スッ

ダークは静かに片手をナックルズに向ける。

ババババババババツ！！！！

その手に黒い閃光が集まる。

「消える！」

(ま…………マズい…………！！)

ダークが叫ぶと同時にナックルズは身構えた。

その時だった。

「カオススピアー!!」

ドガン!!

「グツ!?!」

突如ダークに光の矢が当たり炸裂する。

「なっ!?!」

ナックルズは呆然としてゆっくりと周りを見渡す。

「……………」

ギロツ!

ダークは静かに矢の飛んできた方向を睨みつける。

「ハア……………ハア……………」

そこに若干息の荒いシャドウが立っていた。

その刹那、シャドウが真紅のオーラをまとった。
その足元からはまるで世界が揺れているような大きな振動が伝わってくる。

「……僕を舐めるのもいい加減にするんだな。」

シャドウは少し怒った面持ちを見せながら告げる。

「わっ、わわわー!!」

ナックルズは揺れで立っていらなかった。

「それで俺を脅しているつもりか？ 忘れたなら思い出させてやるが、
貴様は

この俺に一度負けている。それでも俺に勝つと言っつもりか？」

クックックと笑いながらダークはシャドウに言い放つ。

シャドウはフンと鼻を鳴らした。

「……がっかりさせるようで悪いが、僕はまだ全力を出し切っていない。
あれで勝った気になるのは早いというわけだ。」

その言葉にダークは表情を一変させる。

「……ほう、なら見せてもらおうか。貴様の全力の力とやらを……」

「……何の真似だ？」

ダークは静かに尋ねる。

「僕の両手首に付けている力のリミッターを解除させてもらった。」

シャツ！！

そう告げた瞬間シャドウの姿が消える。

「なにっ！？」

ダークは周りを見回す。

「カオススピア！！」

シャドウの声だけが聞こえるが姿が見えなかった。

「なっ！？」

しかしそんなことに気を取られる間はなかった。

数え切れないほど膨大な光の矢がダークを取り囲んでいたからである。

「くっ！！」

そう呟いた瞬間、背中に衝撃が奔る。

「ここだ。」

その正体は金色のオーラをまとうシャドウの鋭い蹴りだった。

ギユウウウウ

ン！！！！！

足を離さないままシャドウはダークを下敷きにして地に急降下する。

「ぐ、ぐぐぐぐぐ……！！」

ダークは脱出を試みるが強大な力で地面に引っ張られるようで脱出できない。

「ハアツ！！」

ドガーーーーーン！！！！！！

シャドウはダークを地に叩きつけた。

「くっ！！」

バツ！！

ダークはすぐさま立ち上がり受身の体勢をとった。

「……」

ダークは苦々しく舌打ちをした。

（ さっきまでのシャドウとはまるで別人だ…一体どうなっている？ ）

俄かには理解できないほどシャドウの力は格段に上がっていた。

「さっきまでの君達の話は聞かせてもらった。」

シャドウはそのままダークに告げた。

「……何の話だ？」

ダークは白々しく聞き返す。

スッ

シャドウは自分の手の上に何か黒い物体を取り出した。

「 貴様、いつそれを！？」

ダークは驚いた表情を見せながらも静かに尋ねる。

「先程空中でいただいた。こんなものでソニックの魂を封印していたとはな……」

シャドウが持っていたのはソニックの魂が封印されている黒いエメラルドだった。

ドンッ！！

「それを返してもらおうかあっ！！！！」

シャドウに肉薄しながらダークは叫ぶ。

バッ！

シャドウは大きく跳躍した。

ギョオオッ！

ダークはそのままシャドウを追う。

ギョーンッ！

かなり高くまで跳躍したところでシャドウは金色のオーラをまといながら急降下した。

「なっ!?!」

突然のことでダークは避けることが出来ない。

ドガッ!!

そしてそのままシャドウはダークを蹴り飛ばした。

「ぐあっ!」

ヒュウウウウ

ドーーーーーン!!

ダークは遠くの巨大な岩に突っ込んだ。

一方シャドウはそんなダークに見向きもせず急降下しながら地を見た。

「フッ」

バツ！

シャドウは持つていたエメラルドを地に投げつけた。
勢いよく地面に落ちたがエメラルドにはヒビ一つ入らない。

「ハアアツ！！」

シャドウはエメラルドめがけて自らの落下スピードをさらに上げた。

パキイイインツ！！！！

シャドウがその上に着地すると共にエメラルドは割れた。

ポウツ！

粉々に砕け散ったエメラルドの破片の隙間から青い球体の様なものが抜ける。

そしてそのまま地に力なく倒れているソニックの中に入っていった。

「う……あ……？」

ソニックの目に生気が戻る。

「ソニック！！？」

ナックルズはソニックに駆け寄った。

「ナ……ナックルズ……？……一体どうなってんだ……？」

ソニックは立ち上がりながら尋ねる。

「シャドウが助けてくれたのさ。」

ナックルズが指さした方を見ると手首にリミッターをはめ直しているシャドウが立っていた。

「……そうか。THANKSシャドウ！」

ソニックはシャドウに親指を立てる。

シャドウは何も言わずフンと鼻を鳴らした。

しかし、誰もが少なからず安堵したその刹那
ドガーーン！……！

「！？」

突如遠くの岩盤が割れ全員がそちらを振り返る。

シューウウウウウウ……

中からダークが現れた。

あれだけシャドウのラッシュを受けたのに傷一つ付けることなく。

咄嗟に全員が身構える。

「……チツ、奴が復活したか。」

ダークはそのまま上昇した。

「……まあまだチャンスはある。今回は見逃してやろう。次会った時が貴様らの最後だ。」

ダークはそう言い残すと、音も無く姿を消した。

RAPID RUSH

「……ダーク……奴は一体……？」

シャドウは呟いた。

「なあシャドウ、あいつ一体誰なんだ？」

ソニックはシャドウに尋ねた。

「彼に見覚えはない。」

シャドウは腕を組みながら答えた。

「で、お前はその後どうするんだ？」

ソニックが再び尋ねかける。

「……彼からカオスエメラルドを取り戻すためにマスターエメラルドを探す。」

「Hun!? マスターエメラルドが盗まれたことを知ってるのか？」

ソニックは驚いた様子で聞き返した。

「そういえばお前にはまだ話してなかったなソニック。」

ナックルズは頭を掻きながら話を続けた。

「何をだ？」

ソニックはナックルズの方に向き直りながら尋ねる。

「実はお前が来る前にシャドウがマスターエメラルドのことを聞きに来たんだ。」

「What!？」

ソニックは驚きの表情を見せる。

「ってことはシャドウ、お前あの時俺達の戦いを見てたのか!？」

「……カオスエメラルドを奪うチャンスをつかっていた。」

シャドウは二人に背を向けながら答えた。

「……ま、どっちにしろ今の俺達の目的は同じってわけだな。」

ソニックは少し表情を和らげた。

「喜んでいる場合じゃないぜソニック。一刻も早くマスターエメラ

ルドを見つけないと
ダークに消されちまう！」

ナックルズは少し慌てた様子で言う。

「ここに居ても仕方が無い。一度マスターエメラルドのあった所へ
戻ろう。何か手掛かりが
見つかるかもしれないしな。L e t ' s m o v e o n ! !」

ダッ!!

言うが早いが三人は駆け出した。

????????????????

ザッザッザッザッザッ

広い草原を「彼」は1人歩き続ける。

「……………つく。」

だが、既に体は傷だらけだった。

「どうなってやがる……………」

「彼」は呟いた。

俺は誰だ？

何であんな所に倒れていたんだ？

何でこんなにボロボロになっているんだ？

「こ」はどなんだ？

これらの思いが彼の頭を駆け巡る。

ズキンッ！！！！

「うっ！！！！！！」

ガクッ

頭に激痛が奔り、「彼」は思わず膝をつく。

「ハア ハア」

動く度に体に激痛が奔る状態でも無理矢理体を立てる。

「……こんな……ところで……死んで……たまるか……」

ザッザッザッザッザッ

目の前が霞んでよく見えないが、それでも「彼」は歩き続ける。

一体何が「彼」をこんなにも突き動かしているのだろうか？

????????????

「ここがマスターエメラルドのあった場所か？」

ソニックは目の前にある台座のような物を見つめながら尋ねた。

「ああ。俺はここで守っていたんだ。」

ナックルズは目を細め、咳くようにその問いに応じた。

（クソッー体どこに行っちゃったんだ……）
その強ばった表情からは怒りとも悔恨ともとれる感情が伝わってくる。

ここはソニックがカオスエメラルドの襲撃を受けた後にナックルズを訪ねてやって来た森の中だった。

ソニックは周りを見回す。

「……どうやらこの辺りには手掛かりは無さそうだな。シャドウ、何か分かるか？」

そして背後で木に寄りかかって腕を組んでいるシャドウに尋ねた。

「……………」

しかしシャドウは目を閉じたまま何も言わなかった。

ソニックはため息をついた。

「くそっ、何処行っちゃったんだ……!!」

ギリッ

ナックルズは少し苛立った面持ちで齒軋りをした。

その時

ガサッ!

背後で草を分ける音がし、全員が振り返った。

「誰だ!?!」

ナックルズは思わず身構える。

中から現れたのは

「「テイルス!!?」」

少しボロボロのテイルスだった。

「ソニック！ナックルズ！シャドウも！」

テイルスは少しだけ笑顔を見せながら嬉しそうに言った。

「テイルス！お前……どうやってあそこから!?!」

ソニックは少し驚いたように、だが嬉しそうにそう尋ねた。

「あの時はボクももう駄目かと思ったよ。けど墜落する直前で我に帰って非常用ボタンを押して脱出したんだ。ところで何かあったの？何だか皆慌ててるみたいだけど……」

テイルスはソニック達に尋ねる。

ソニックはこれまでの経緯を全てテイルスに話した。

「ダーク」の存在のこと

カオスエメラルドがそのダークに操られていること

マスターエメラルドが盗まれてしまったこと

その一部始終を聞くとティルスは腕を組み考え込んだ。

「うーん……確かに急いでマスターエメラルドを探さないかね。」

ティルスは真剣な表情でソニックに告げる。

「何か良いアイデアは無いか？」

ソニックがそう尋ねると、ティルスは少し思案顔で提案した。

「マスターエメラルドはエネルギー反応が強いからレーダーで探すのはどうかな？」

「Good idea!!」

ソニックは親指を立てる。

しかしティルスは再び真剣な表情になる。

「……ただ、今からボク1人で作ったんじゃ間に合わないかも……材料も足りるか分からないし……」

その言葉にソニックも真剣な顔になる。

「その隙にダークに見つかったらアウトってわけだな。」

ソニックは腕を組む。

「……けど、方法が全く無いってわけでもないんだ。」

それまで沈黙を守っていたナックルズもその言葉に少なからず反応し、ソニックの隣で

ティルスの次の言葉を待った。

「……エッグマンの手を借りる。」

少し顔をしかめてティルスは告げた。

「「!!」」

その言葉にソニックとナックルズもつられて顔をしかめた。

「……多分そうするのが一番早いと思うんだ。」

嫌だけどね…… そう言いたげにティルスは続けた。

「あのドクターがそう簡単に手を貸してくれるとは思えないがな。」

ずっと黙っていたシャドウが初めて口を開いた。

「うん……でも今の所これしか方法が無いんだ。」

ティルスはちょっと困った面持ちに変わり、ポリポリと頭を掻いた。

「……悔しいが俺もそう思う。今回ばかりは奴に頼るしかない。」
ナツクルズも嫌そうな面持ちで言った。

「ま、奴にとつちや世界征服に邪魔な奴が現れたんだから協力してくれんじやないの〜?」

ソニックはのん気な表情を見せながら言った。

「それはあるかもね。」

ティルスも笑いながら答える。

「とにかくそうと決まれば早速エッグマンの所へ行こうぜ! Let's move on!」

ダッ!

四人は駆け出した。

????????????????

「……」

ナックルズは目の前の大きな扉を見上げて呟く。

「……ったく、もう新しい基地を作ってたのか。あのヒゲのオッサン一体何個基地作ってたんだか……」

ソニックは呆れたように言う。

「とにかく、ドクターの居るところに急ぐぞ。」

シャドウの声を合図にソニックたちは歩き出す。

ギギギギギギ……

大きく重い扉をゆっくりと開く。

「……うん、誰もいないよ。」

中を少しだけ覗き込んだティルスが言った。

その言葉通り、扉の向こうには薄暗く人気がない通路が横たわっているだけだった。

「よし、行こう。」

ナックルズがそう告げた瞬間

ビ

ッビ

ッビ

ッ………!!

突然けたたましく警報音が鳴り響く。

「うわぁっ!?!」

テイルスは驚き飛び上がった。
ソニックとナックルズも咄嗟に警戒する体勢をとった。

「侵入者じゃ!!侵入者を排除するのじゃ
!!」

エッグマンの声が響き渡った。

『シンニューウシャ!!シンニューウシャ!!』

ドドドドドドドドドドッ!!!!

そして奥から数え切れない数のエッグマンに似せた赤いロボットが
走ってくる。

「こっつなると思ったぜ!!」

手袋をはめ直しながらソニックは叫ぶ。

「皆気を付けて!来るよ!!」

テイルスは構えた。

「こっとなつたら強行突破だ！まとめてぶっ壊してやるぜ！！」
拳を鳴らしながらナックルズも叫ぶ。

「チツ、ガラクタ共が……僕の邪魔をするなっ！！」

唯一全く動じていなかったシャドウもそこで沈黙を破った。

「It's show time！！」

バツ！

ソニックの声と共にソニックとシャドウが猛スピードでロボットの群れに突っ込む。

「ハアアアッ！！」

バババババババツ！

二人の突っ込んだところから大量のロボットが吹き飛ばされている。

「オラオラオラアッ！！」

ナックルズはその後から続き吹っ飛ばされたロボットを更に追撃す

る。

「えーい！！」

ドオンッ！！ドオンッ！！

テイルスはどこから取り出した銃を腕に装着し、ロボットを砲撃していく。

「皆！この調子でガンガン行くぜ！」

ソニックはそう言いながらロボットを吹き飛ばしていく。

その頃

「ええい、警備ロボ達は一体何をやっておるのじゃ！？」

エッグマンは司令室で大きなモニターの下でキーボードを叩いていた。

ブウンッ！

画面に監視カメラの映像が映る。

「なっ、ナヌ！？」

エッグマンは驚愕した。

画面に映されたのはロボット達の残骸。

「クソー！一体誰の仕業じゃあ！？」

エッグマンはキーボードを力任せに叩く。

その時

ドガァン！！！！

司令室の入り口で爆発が起こる。

「むうっ！？」

その轟音に思わず振り向くと、

「よおエッグマン。」

爆発の中から姿を現したのは

JOIN FORCES

「ソ、ソニック!？」

その正体は言うまでもなくソニックだった。

ザッ

エッグマンがその名を呼んだのと同時にソニックの周りにその仲間達が　　テイルス、ナツクルズ、シャドウが姿を現す。

エッグマンは立ち上がった。

「な…ななな…なんじゃ貴様ら!？ワシはまだ何もしとらんぞ！」

エッグマンは後ずさりをしながらそう叫んだ。

「エッグマン、頼みがある。」

「むうつ!？」

ナツクルズの言葉にエッグマンは足を止める。

「僕達に協力して欲しいんだ。」

続けてティルスが言う。

「協力じゃと？」

エッグマンは思わぬ申し出に眉を吊り上げる。

ソニックは先程ティルスに話したようにエッグマンに事情を説明した。

「ダーク」の存在のこと

カオスエメラルドがそのダークに操られていること

マスターエメラルドが盗まれてしまったこと

一部始終を聞くと、エッグマンはソニック達に背を向ける。

「……フン、ワシの基地を目茶苦茶にした貴様らの頼みなど……」

「ドクター、今回の敵はかなりの強敵だ。目的も定かではないが、ドクターの世界征服の邪魔をすることは恐らくほぼ間違いない。奴を討つにはドクターの手を借りる他無い。」

シャドウの言葉にエッグマンは動きを止める。

「……で、貴様等の要求は何じゃ？」

エッグマンは背を向けたまま尋ねる。

「マスターエメラルドを探さなきゃいけないからレーダーを作りたいんだ。」

ティルスが代わりに答える。

「……ティルスよ、来るのじゃ。」

プシュ　　ッ！

そう言うとエッグマンは先程ソニックが破壊したのと反対方向にある自動ドアから司令室を出た。

「皆、ちょっと行って来るね。」

ティルスはそう言い残すとエッグマンの後に続き司令室を出た。

????????????

ちょうどその頃　　ソニック達の居場所から遙か彼方に

「ククク……」

何か可笑しいのか「彼」は急に笑い出す。

「……奴ら、今頃何をしているか……これを探し出すために必死になっているか……」

「彼」は独り呟く。

「……せいぜい必死になるがいい……見つけた所でどうにもならないのだから……」

クックックと笑いながらそう呟く「彼」の背後は、何やら輝いていた。

????????????????

(……遅い……)

苛ついた心情でナツクルズはトントン指を動かす。

もう何時間待たされたことか…… とナツクルズは思う。

「……………」

シャドウは静かに壁に寄りかかり、目を閉じている。

「……………」

ソニックも壁際に座って足を組み、目を閉じている。

長い沈黙が続く

その時だった

プシュ　　！

ドアが開き、全員が振り返る。

「お待たせ！」

テイルスが何か丸い物を持ち部屋に戻ってきた。

「随分遅かったな。」

ソニックは立ち上がりながら言う。

「ごめんね。結構作るのが大変で……」

テイルスは少し申し訳なさそうに言う。

「でも、完成したんだよ！」

そして、手に持っていた丸い物を見せる。

「これがそのリーダーか？」

ナックルズが尋ねる。

「そうじゃ。」

少し遅れて入ってきたエッグマンが代わりに答える。

「それを使えばマスターエメラルドがどこにあるか分かるじゃろう。使い方はテイルスに教えてある。」

「Thanksエッグマン！」

ソニックはエッグマンに親指を立てる。

「一刻も早くダークとやらを倒すのじゃぞ。そいつが居る限りワシの世界征服は出来そうになさそうじゃからな。」

エッグマンは顔をしかめて苦々しく言う。

「分かってるって。さて、早速行くか！Here we go！」

ダッ！

ソニックのかけ声と共に四人は走り出す。

「……………」

一人残されたエッグマンは考え込んだ。

「……………ダーク・ザ・ヘッジホッグ……………どこかで聞いたことのある名

「じゃな……じゃが

どこで聞いたかが思い出せん……」

????????????????

ソニック達がエッグマンの基地から出ると同時にソニックはテイルスを振り返る。

「で、何処へ行けばいいんだ？」

「えつとね……」

ピッ！

テイルスはレーダーを起動させる。

ピッピッピッピッピッ！

「……レーダーによるとここから北に約100km位行った所だけど……ソニックなら大した事無い距離だね！」

「Of course!」

ソニックは余裕たつぷりに告げる。

「グズグズしている時間は無い。さっさと行くぞ。」

シャドウは冷静に言った。

「OK。皆遅れるなよ！READY……………GO!!」

ダッ!!

四人は走り出す。

????????????????

大分走つたが、溪谷に着くと四人は足を止める。

「後どの位だ？テイルス。」

ナツクルズが尋ねる。

「レーダーによるとこの辺りなんだけど……………」

その言葉に反応してナツクルズは周りを見渡す。

「……………お、おい！あれ！」

ナツクルズはまっすぐ先を指差した。

少し離れた場所にマスターエメラルドがあった。

「あ！あつたあ！」

テイルスも嬉しそうに叫ぶ。

ダッ！

ナックルズはマスターエメラルドに向かって駆け出した。

「良かった〜！これでカオスエメラルドを止められるね！」

テイルスが笑顔でソニックを振り返った。

「ああ！もうダークの好きにはさせないぜ！」

ソニックも微笑みながら答えた。

その時だった

ガンッ！！！！！！

「！？」

いきなりガラスに物が当たったような鈍い音がしてソニックとテイルスは音がする方を見た。

「……………」

そこでナックルズが何も無さそうな所でまるで壁に猛スピードで激突したようなポーズをとっていた。

ズルズルズル……

ポテッ

そしてそのまま力なく地に崩れ落ちた。

「……お、おいナックルズ！大丈夫か！？」

一瞬呆気にとられていたソニックはナックルズに声をかけた。

「……ッテテテ」

ナックルズは鼻を押さえながら顔を上げた。

「な、何だこれ？」

ナックルズは透明な壁らしき物に手を当てる。

「なんだろう……？透明なバリアーかな？」

テイルスも同じようにそれに触りながら首を傾げる。

「どうやら、マスターエメラルド全体を囲っているみたいだぜ！」

いつの間にか向こう側へ回っていたソニックが言った。

「……壁があるなら壊せばいい。」

シャドウが口を開き、ゆっくりとマスターエメラルドに近づく。

「お、おい……」

テイルスとナックルズは少し後ろに下がった。

スッ

そしてゆっくりと片腕をもう片方の腕の方に伸ばす。

ババババババババババツ!!!

そしてその腕に黄色い光が集まる。

「カオススピアー!!」

バツ!

シャドウが腕を振ると黄色い光の矢が数本マスターエメラルドに向かって飛んでいく。

ドガア

ン！！

そしてそのまま爆発を起こす。

シューウウウウ

マスターエメラルドが余すところなく灰色の煙に包まれた。

煙が徐々に引いていくが

「……………」

シャドウは腕を組み何も言わずにその光景を見ていた。

中からはさつきと変わらず美しい光を放ちながら輝くマスターエメラルドが姿を現した。

しかしナックルズがそれに近づこうとするも、やはりまだ壁が存在していた。

「……………駄目か。」

シャドウは舌打ちをした。

「……………クックック」

「……………?!?!?!?」

その瞬間、不気味な笑い声が響いた。全員が咄嗟に構える。

「その声……ダークか!？」

シャドウは叫ぶ。

シューウウウウウウウウウウウウウウウ!!!

その瞬間、マスターエメラルドの上空に禍々しい闇色の煙が集まる。

そしてそのまま煙は奴の「ダーク」の姿となった。

「……その通りだシャドウ。マスターエメラルドを手に入れるために必死のようだな。」

ダークはシャドウを見下ろしながら静かに告げる。

「失せろ!カオススピア!!!」

ババツ!!!

シャドウはダークめがけて再び光の矢を放つ。

ドガァン!!!

「チッ！」

しかし、透明な壁が邪魔をしてダークに当たらない。

「ククク、まあそう焦るな。これから貴様達に最高のショーを見せてやろうと思つてな。」

「あいにく、お前の暗いショーなんか見たくないんでね！」

ダークの言葉にソニックが言い返す。

「……まあそういうな。まずは客席に座ってもらわないとな。」

スッ

ダークが手を天に向ける。

スウウウウウウッ！！

するとその掌に黒い光が集まる。

「ハアッ！！！」

ドンッ！！

ダークが叫ぶと共に、掌から複数の黒い物体が飛び出す。

ギユウウツ!!

「なっ!?!」

その黒い物体はソニック、シャドウ、テイルス、ナックルズのそれぞれに向かって飛んで行き、ロープ状になってソニック達に巻きつく。

「し、しまった!」

ギギギギギギギツ!!

ソニックは必死に振り解こうとするが、物凄い力で巻きついてくるこの黒い物体を外すことが出来なかった。

「くっ!」

「んくく!!!」

ソニックだけでなく、テイルス、ナックルズ、シャドウも同じ状態だった。

「ち、ちつくしょう!! やっぱリマスターエメラルドを盗んだのはてめえだったんだな!!!!」

ナックルズはダークに向かって怒鳴る。

「……ああ。あそこで言ったらつまらないと思ってな。」

ソニックの言葉にナックルズは一瞬考え込む。

「　　そうか、そうだったな。すまんソニック。少し取り乱したようだ。」

「Don't worry!」

ソニックはウィンクした。

「クツクツク　　」

そんな二人の会話を聞き、ダークは静かに笑う。

「　　欠片を探しても無駄だぞ。」

「「!?!」」

二人はダークを振り返る。

「　　マスターエメラルドは壊れても欠片を集めれば元に戻る。それを俺が知らないとも思ってたのか?」

ダークは不敵に笑う。

「何で欠片を探しても無駄なんだ?」

ソニックが尋ねる。

その刹那、ダークが両手を広げる。

フオオオオオオツッ！

そして、ダークの体に闇色のオーラがまとわりつく。

「ハアツッ！！！」

バババババツッ！！

ダークが叫ぶと共にダークの体から再び複数の黒い物体が飛び出し、それぞれ別方向に飛び去っていった。

「……………」

ナックルズは何が起こったかよく分からない顔をしている。

「……………」今、欠片が飛び散ったところに俺が生み出した欠片の守護者を送った。

欠片に近づく者全てを排除する危険な存在を、な。」

「なっ！！！」

「……まあ、今からここで消滅する貴様達にとっては意味の無い話
だがな……」

「何だつて!？」

ティルスが叫ぶ。

スッ

ダークが徐に手を天に向ける。

「……」
「……」
「？」
「……」

ソニック達は天を見上げた。

「なっ!？」

「そんな!？」

ソニック達は愕然とする。

「クッククク……これが何だか分かるよな？」

「カオスエメラルド!？」

そう、ダークの手に舞い降りたのは

異様な光を発する七つ

の caos エメラルド。

「くそっ！てめえ卑怯だぞ！！」

ナックルズはロープ上の黒い物体を振り解こうともがく。

「おのれ！」

シャドウも同じようにもがく。

ソニックとテイルスも同じ状態だった。

「貴様らまとめて消えるがいい！！」

ダークがゆっくりり手を動かすと、caos エメラルドが凝結していく。

バツ！！

ギョオオオツ！！

ダークが腕を振り下ろすと同時に凝結したcaos エメラルドが身動きの出来ないソニック達に襲いかかる。

(やっ、ヤバい！！)

ソニックは必死にもがく。

その時だった

コオオオオオツ！

カオスエメラルドが青白い光を放ちながら動きを止めた。

「なにいつ！？」

ダークは目を疑う。

「久しぶりだな！ダーク！」

空から声が聞こえ、ダークは空を見上げる。

そこに居たのは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548y/>

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

2011年12月21日19時57分発行